

平成23年度

「ふるさと文学」情景作品 コンクール入選作品集

* 第36回 全国高等学校総合文化祭プレイベント *



創造の舞台～美しき越の国～
2012 全国高総文祭とやま2012

主催

富 山 県
富 山 県 教 育 委 員 会
富 山 県 中 学 校 文 化 連 盟
富 山 県 高 等 学 校 文 化 連 盟

平成24年1月発行

平成23年度「ふるさと文学」情景作品コンクール入選作品集

編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室
全国高等学校総合文化祭推進班
〒930-8501 富山市新総曲輪1-7
TEL076-444-8907 FAX076-444-4434
ホームページ <http://www.soubun2012.tym.ed.jp>

グローバル化が進展するなか、次世代を担う若い皆さんが根なし草とならないためにも、ふるさとに誇りと愛着を持ち、家族や地域との絆を大切にしながら、たくましく未来を切り拓く人材を育成することが大切です。

こうした人づくりの一環として、昨年度からこのコンクールを実施していますが、前回よりも応募数が増えるとともに、ふるさとへの思いを若者らしい感性で表現した素晴らしい作品が多く、大変頼もしく思っています。

また、今年の夏には、ふるさと文学を楽しみ、学ぶ拠点として、「高志の国文学館」が開館する予定です。大伴家持の越中万葉から近・現代までの純文学をはじめ、マンガ、アニメ、映画など、ふるさと文学の魅力を幅広く紹介し、子どもから大人まで幅広い県民の皆さんが、楽しみながら学ぶことができる施設にしたいと考えています。ぜひ、多くの方に足を運んでいただき、四季折々の美しく豊かな富山の自然や風土の中で生まれた様々な作品にふれていただきたいと思っています。

東日本大震災は、人と人との絆や地域の支え合いがいかに大切か、ふるさとがいかに尊いものかをおためて考えさせられる機会になりました。この作品集をきっかけに、若い皆さんがふるさとのすばらしさを再認識し、国内外で広く活躍できる人材へと成長してくれることを期待しています。



知事賞・金賞・銀賞・銅賞受賞の皆さん

富山にゆかりのある「ふるさと文学」にふれ、感じた情景や、心情を文芸、美術、写真で表現することで、中・高校生がふるさとの魅力を知り、愛着や誇りを持つきっかけとなるように、平成二十三年度「ふるさと文学」情景作品コンクールを実施しました。今年度は県内中学生・高校生から一三二七点の応募がありました。

このコンクールは、今年八月に富山県で開催される「第三十六回全国高等学校総合文化祭」のプレイベントとして位置付けており、大会期間中には、「高志の国文学館」で入選作品の展示を行うことにしています。富山の高校生の皆さんが、ふるさとへの誇りを一層高める契機となることはもちろん、全国の高校生にも富山の文化を発信する機会となることを期待しています。

今後とも、皆さんがふるさと富山の文学に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとなるよう心から願っています。

入選作品集の利用にあたって
・入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
・文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとにまとめて掲載しました。
・美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
・入選作品集は、「全国高総文祭とやま2012」のホームページからダウンロードすることが出来ます。

文芸部門

知事賞

『鶴のいた庭』を読んで

流転する万物の中で生きる

射水市立大門中学校二年 盛田 香菜子

富山県は昆布の消費量が全国で一位であるという。我が家でも煮物、めんつゆ、おにぎりに昆布めめ等、毎日使われない日はない。すぐに無くなってしまふので母は毎回羅臼昆布の長いのが数枚入った大袋で購入し、祖母が使い勝手の良いようにキッチンバサミで切ってビンに詰める。昆布を使った料理は薄味でも美味しく食べられる。富山県の近海では昆布は水揚げされない。にもかかわらず昔から大量に消費してきた訳は、伏木港や岩瀬港が北前船の中継地として北の海で捕れる海産物の交易が盛んに行われていたからである。

「鶴のいた庭」の「私」は、そういう北前船の廻船問屋に生まれた。物語に登場する自宅は広く豪華で屋根に望楼を備えていた。庭には渡り鳥が何百と来る池があり、そこに問屋の象徴たる二羽の鶴が羽を切られて飼われていた。時代は一般の家は瓦ぶきではなく屋根に「おにぎりのような石をおいた」だけの頃である。いかに裕福であったことだろう。

私は実際に伏木の北前船資料館に足を運んだ。そこは活字で読み、想像していたよりも暗く、当然ながら古びていた。望楼にも登ってみた。しかし海は近年に建てられた建物に遮ぎられ、線のようにしか見えない。私は目を閉じ、おにぎりのような石が乗った屋根の向こうに広がるにび色の海の面に白い帆がポツンと点をなす光景を思い浮かべてみた。多分、一生実際に見る事のできない光景だろう。

物語の中の「私」こと堀田善衛は小学校一年生の幼い時に実家の没落を体験した。もう羽を切られた二羽の鶴はいない。鶴を眺めて「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」と泣いていた。老年に入ってから激烈な変動を生きた曾祖父も、もういない。代わりに「ブスブスブス」：という音をたてて飛んでいく飛行機を眺め「どこへ行くのだろう」と呟く。

何百年も何世代も住み続けた家を追われ、幼少の頃からすべてはうつろに変化するものであると感じながら生きるのには、どのような心もちだろうか。何をやりとげても無駄だと感じるのではないか。

水平線の左端は能登半島、右端は滑川あたりの海岸。目の前には昔も今も変わらずに波がうち寄せる富山湾が広がる。水平線に浮かぶ蜃気楼をシベリアの森林地帯をうつつし出していると思っていた昔。行った事の無い外国の景色が浮かびあがっていると信じていたからこそ、そのはかなさはいつそう深いものであったかもしれない。

対して曾祖父の思いはどうであったろうか。長く廻船問屋の長として築いてきた財が時代の波に捉えられ一切が無に帰してしまうのに自らは無力だ。「千萬無量」の思いを抱えながら死を待つのみ。悔しく思ったか。悲しく思ったか。それともやはり無常を感じていたのだろうか。「万物は流転する。」聞いた事のある言葉だったがこの作品を通して私は疑似体験ができた。

人が変わり、建物が変わり、有ったモノが無くなり、無かったモノができる。そうやって人々の暮らしや営みは続いていく。今年起きた東北の大震災、それに伴った福島第一原発の事故は、まさに諸行無常ではないか。ニュースを見る度、こんな辛い事があってよいものかと心が痛くて張りさけそうだ。

しかし私たちは流されるままに生きてはダメだと思う。金ピカに光る無表情な仏像の顔に安楽を求めただけでは決して前に進めない。手を取り合い、助け合い、励まし合い、小さな力でも精いっぱいをしたい。

今がずっと変わらずにあるのではないからこそ、一日一日を大切に、生まれ育った富山を、日本を愛していきたい、元気づけたいと今、心の底から思う。

この本



鶴のいた庭 (蘭車・至福千年)
堀田善衛 / 著 講談社
二羽の鶴に託し、作者の実家、高岡市伏木の廻船問屋が没落するさまを望楼にたたく老人の死とともに印象的に描かれた作品です。本書に収録。

『漂民次郎吉』を読んで

異なる文化と異なる優しさ

魚津高校二年 高倉 周一郎

異国での新しい生活から生まれる恐怖と不安。生き抜くことだけを考えた異国での日々。その中で感じる事が出来る異人の優しさが手に取るように伝わってきた。越中富山、東岩瀬の次郎吉らの漂流と、異国での生活は、江戸時代の当時鎖国下にあった日本に、少なからず影響を与えたに違いない。

次郎吉には、他の漂流民とは異なる強い意志があった。なんとしてでも故郷に帰り、離縁した妻に会うというものだ。私は、読んでいる最中、壮大なドラマを見ていけるような思いになった。漂流時の絶望感から、救出後の次郎吉の前向きな好奇心と社交性、異国の地で、たくましく生き抜いた姿、そんな生き様に、私は、気が付くと引き込まれていた。

本の中で、次郎吉は、ハワイ、カムチャッカ、オホーツク、アラスカと熱帯から寒帯まで様々な場所へ連れ回される。普通の人ならば、楽に順応出来るはずがないが、次郎吉は違った。次郎吉が、姿形違う大男たちの中に積極的に入って行ったこととさえ、驚きなのだが、さらに、言葉を覚え、積極的に情報を収集しようとする姿勢は、当時の日本人にとっては考えられないことだっただろう。また無邪気とさえ思えるような積極性によって異人たちにかわいがられる。懐に飛び込んでくる者をいとしく思うのは、地球上どこでも同じなのだと強く感じさせられた。

鎖国下にあった日本で、自分が「日本人」であるということに自覚することは、難しいように思われる。異国の地へ行き、文化の違い、言葉の違いを知り、初めて考えることだろう。次郎吉らもそうである。私は、日本にいたときは決して意識することはなかったであろう。「日本人」というものを誇りに思い、卑屈な態度を取っていないことに再度、驚かされた。また、激変する環境に適応する柔軟さを持っていたことも間違いない。日本の着物と下駄をはくのではなく、その地での服装をしっかりと身に付けていたからだ。そしてそれは、多くの現代人が失った「日本人として恥ずべきことをしてはならない」という考え方を持っていたからこそぞだと思つた。

『花子のくにの歳時記』を読んで

魚津高校二年 相川 有希美

日本には、どの地域にもそこに根付く民話がある。花子のくにの歳時記は、幼いころ祖父母から民話を聞くのが何よりも楽しみだった著者・辺見じゅんが民話の源郷を求めて日本各地の村々を訪れるエッセイ集である。

読み終えたとき、私は著者と一緒に旅をしていたように感じた。村にいた名もなき民話の語り部の話や、著者の故郷・富山での思い出話を、私は確かに聞いたのだ。それは不思議でどこか懐しく、時々ぞくりとするが、どれも温かいものだった。きつと著者の語り口が大切な記憶を慈しむようであったからだろう。

実は、私の住む地区にも民話がある。このエッセイを読む前は、民話があるなんて田舎であることをアピールしているようで、嫌だった。しかし、読み進めるうちに語り部や村民が民話を先人からの預かりものとして大切に、誇りを持っていることを知り、民話を毛嫌いしている自分が恥ずかしくなった。そして昔の人々が伝えてきたからこそ民話があることに気が付き、自分の地区のことが誇らしく思った。

また、この本を読んでとても印象に残ったエピソードがある。著者の父が死んだときの母との会話を著者が思い出してという話の中、著者は母に、中々に帰らない父と何故別れなかったのかと問う。すると母は、

「お父さんが好きだったからよ。だってお父さん、かわいいところがあるでしょ。」とさりと答えた。この言葉を聞いた瞬間に私は著者をとて羨しくなった。夫婦でもケンカはするし、それが続けば離婚する人たちもいる。だが、著者の親夫婦は互いが好きだから別れないと言う。この言葉は子供にとって最上級に嬉しいものだと私は思う。よく子供は夫婦の愛の結晶だ、などと言われるが、まさにその通りであって、その結晶の生みの親が今も変わらず愛し合い続けているという事は、子供にとつてこの上なく喜ばしいことではないか。テレビドラマで母が子供に、「アంతナなんか産まなきゃよかった。」などと云っているのを聞くと、自分のことではないと分かっていてもひやっとして胸がチクチク痛むことがある。著者の母の言葉はそのチクチクごと胸を温かくし、じんわりと溶かすような力を持っていると感じた。

この作品を読み終えて気になったことがある。それは、当時の日本の異国船に対する対応である。次郎吉らが、日本へ帰還したとき陸から一艘の船がやって来る。その船に乗っていた役人の言動が衝撃的だった。漂民を送り届けてくれたロシアの船長に感謝の言葉もなければ、何かお礼の品を渡すわけでもない。ただ、ひたすら飲食した揚げ句、抜刀するという失礼極まりないものだった。船に必要な薪や水のことさえ拒否して、公儀には自らの出世になるように話せと要求した男。この男が当時の日本という国を表しているように感じた。

この対応とは異なり、異国の人々は、少なくとも異人というお客を悲しませるようなことは絶対になかった。漂民だから、異人であろうと無償で助けるだろうか。それぞれで、次郎吉は、それと違って働いてはいない。だが、何ヶ月にわたって滞在しているのだ。さらに、居場所を提供するだけでなく、豪華な食事、きれいな服を与えたのだ。このようなことが有りえるだろうか。今の時代、全くといっていいほど見られない光景である。

読み終えたとき、どうしてこれほどまでに親切なのだ、ふと疑問に思ってしまった。考えていると、この疑問に思うこと自体が今の現代人が抱える悲しさなのだ気が付き、何とも言えない気持ちになった。次郎吉らが異人と交流している姿を思い浮かべると、ただただ温かかった。人の温かさというものを忘れかけていた私は、人が持つ本来の強さと優しさを思い出させられた気がした。漂民次郎吉は、これからも現代人の失ったものを考え直すきっかけを与えてくれるに違いない。



この本 漂民次郎吉 津田文平／著 福村出版 江戸時代、岩瀬の北前船長者丸が難破。越中の船乗りたちが、ロシアやアラスカでの厳しい生活をたくましく生き抜いた様を描いた歴史ドキュメンタリーです。

この本を通して、私は自分の中の新しい世界を感じられるようになった。タイトルに歳時記とあるように、どの話にも日本の四季が色彩やかに描写されていた。そしてそれは著者の故郷の富山が原点にあるのではないかと思つた。富山という土地とか謙虚とかいう言葉で表されることが多く、私もそう思っていた。また、この本に出てくる村々も、そういった田舎である。しかし、田舎だからこそ見つけることができる、自然や生き物の力強い美しさを、著者は見事に言葉にしていた。私はそんな文を読むたびに、この人は富山を、富山で過ごした日々をとても大切にしているのだろうと感じた。それから、私も著者のように自分の故郷を大切に思える人になりたいと思つた。私は現在高校二年生だ。あと一年と数ヶ月たてば、大学生になっていて、もしかすると富山にいないかもしれない。ここではないどこかで大学を卒業し、そのままそこで就職する可能性もある。それでも私は、富山で生まれ育つたのだ。それはどこへ行っても変わらない。著者・辺見じゅんは早稲田大学に通つたが、彼女の創作活動の根っこには、富山での生活があると思う。なぜならこの作品には富山を思わせる風景や自然、人の温かさがあつたからだ。もし大人になつた私が東京に住んでいたとしても、著者のように、私の根っこにあるのは、田舎だけ温かくてほつとすると、この富山であつてほしいと思つた。



この本 花子のくにの歳時記 辺見じゅん／著 角川春樹事務所 水橋の祖父母のもとで育つた著者が、民話の心の足跡をたどり、各地で民話の語り手と出会い、四季の美しさ、人間の営みを温かく描き出すエッセイ集です。

『とべないホタル』を読んで

ホタル

富山北部高校三年 白石 有亮

「輝（あきら）は飛べなかった。立山の中腹に大穴を開けて、今は離れた場所で治療を受けていると聞いたが、風の噂だから正直、壁のはらわたに傷をつけておいて天罰がくだらない筈がない。と、口の中を氷で冷やししながら「銀」は思っていた。自分が今座っている急勾配な川の土手の下には、つい先程のレースでつかれた様になったプロペラ機があった。」

「だから、エンジンに虫（バグ）が入っていたのは、お前のせいじゃないだろう。」と、プロペラ機の下から広志が顔を出して言った。確かにバグが入っていたことは俺のせいではないが、

「もしかしら昨日、フタを開けたままグッスリ寝ちまったかも、しれないんだ。」広志は笑いながら「考えすぎだ」と言った。

銀は心配性だった。輝がご自慢の軽機で穴を開けたのはもう半年も前なのだ。仲間内でも、ほとんどの人は気を取り直して次のレースに臨もうとしている中、銀だけはレースの出場権を得ていながら「リハビリ」の状態だった。普段なら、銀は絶対に口の中を切つて氷で冷やすような男ではないのだ。

ここでは年に二回ほど大きな大会がある。高校生らが速さを競うために機体を持ちよって、富山の外周をぐるりと一周する。輝が最後に出たのは春の大会で、銀が出ようとしているのは秋の大会である。

「銀、お前の口が治つたら飛ぼうぜ。へましないように俺も乗つてやるから。」

少し考えてから、銀は「治つたらな」と答えた。水を囁む音が広志にも聞こえた。

その時、土手の上から二人を呼ぶ声がした。ケイだ。

「どうしたんだ。今日は車椅子じゃないのか。」

「調子がいいの。」

片わきに松葉杖を挟み、ケイは足を軽くあげて見せた。制服を着ているからきつと学校の帰りだろう。すると、ケイを見た広志がプロペラ機の下からはいずり出てきて、「ケイ、お前も銀に言つてやつてくれ。こいつ、あんたの兄のことでいまだにセン

チなんだ。」

と言った。ケイは少し考えてから、

「ねえ、銀、ホタル、見に行かない。」

と言った。銀はいかにも面倒だという風に断ろうとしたが、広志が背中を押しながら行けと言うので、仕方なく行くことになった。

あたりも暗くなった頃、銀は足の悪いケイをおぶさって、田んぼへの道を歩いていた。

「なんだつてお前、急にホタルなんか。」

「見たらきつと元気が出るわ。それに、今日は何かがある気がするの。」

なんだよそれ、と思いつつ、二人はようやく目的の田んぼについた。いつも見る光景ではあるが、自然の光はやはり美しい。

「まあ、きれいだな。」

銀はそう呟いて、何かを眺めているらしいケイのほうを見た。すると、ケイは一匹のホタルを指さした。そのホタルは、二枚の羽がちぢれたようになっていても飛べるように見えるなかった。しかし、そのホタルは電灯を真っ赤にもやし、羽を動かして、飛ぶことをあきらめようとしなかった。

「このホタル、銀みたい。」

ケイは言った。銀はケイの言いたいことがなんとなく分かった。その上で、

「俺は、輝みたいだと思ふな。」

と言った。

俺もこのホタルのようになれるだろうか。銀は立ちあがり、飛ぶまねをするように手を広げて見せた。

「元氣、出たかしら。」

「たぶんな。」

ホタルが飛び交う田んぼのあぜ道のずっと向こうに、知ってるやつの人影が見えたような気がした。



とべないホタル
小沢昭巳／著 ハート出版
羽が曲がってとべないホタルが仲間たちに助けられ、新しい光を放つ童話です。富山の教員であった作者が、子どもたちに託した願いから生まれた物語は、全国の人々に共感され、感動を呼びました。アニメ化されました。

剣岳 点の記を読んで

魚津高校一年 黒崎 晴子

三年前、私は「剣岳点の記」の映画を観ていた。当時この映画は各界から絶賛を受けていたが、私の感想は、「ただ山に登っただけの映画」といった非常に貧しいもので、なぜこの映画がそれほどまでに良い評価を受けているのかが全く理解できなかった。家に帰り、この感想を山好きの父に話すと、「あれはただ山に登っただけの映画じゃないんだ。おまえにもいつか、あの映画の本当のすごさが分かるようになる。」となにやら意味深なことを言っていたのを思い出す。

先程、山好きの父と書いたが、父の山好きは大変なものだ。本棚には、山関連の本が何冊も並べられており、父の山行記も十冊ほどあった。父は危険な山登りが好きで、普通の人のように整備された登山道を使って山に登るのではない。どちらかというとアルピニストがする山登りに近い登山が好きなのだ。冬の剣岳に登ったこともあるし、外国の山に登ったこともある。父の友人も何人か山で亡くなっていた。

私は山登りが嫌いだった。私にはなぜ、父がそれほどまでに山が好きなのか到底理解できなかった。私自身、小学校の親子ふれあい活動などで登山をしたことがあるが、それはそれは辛いもので、もう二度と山なんか登りたくない、と思ったほどだ。そして、この疑問はこの映画を観た後、いつそう強くなり、暇があると、父の山行記を読むようになった。山行記からは、いつも山の魅力や危険など様々な表情がいまひとつ伝わってきた。

ある日、私は山行記を読んでいると、本棚の中から一冊の文集を見つけた。その文集は父の山で亡くなった友人を忘れまいと、彼女の山友達が作ったものだった。中には彼女が幼い頃の文章や、山行記、彼女自身が山で絵とともにかいた詩などがつづられている。私がとくに好きなのは、彼女自身によってつづられた絵と詩のコーナーである。彼女はとても絵がうまう、詩の言葉選びも絶妙で作品として好きなのはもちろんだが、その詩から彼女の山に対する思いの変化や、山登りをする中で変わっていく彼女の姿がとても強く感じられるからだ。山登りは私の中で、辛くて仕方なかったものから、大切な仲間と共に行うとても素晴らしいものへと変化して

この本



剣岳 点の記
新田次郎／著 文春文庫刊
日本地図を完成させるため、不可能とされた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公らの不屈の努力、山を愛する人々の友情を描きます。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作です。映画化されました。

『高熱隧道』を読んで

先人の礎

魚津高校二年 田中 悠也

現在と同じように、その時代は電力が不足していた。太平洋戦争直前の昭和一九三六年、黒部川第三発電所の建設は始まった。はるか山奥、秋の終わりには雪に閉ざされてしまう、前人未踏の地にダムを造る。そのためには、そこまで物資を輸送する通路も必要不可欠だった。樺平からの軌道トンネル工事には、多くの人夫、技師たちが携わった。彼らは常に死と隣合せだ。雪崩、崩落、暴発、トロッコの暴走。次々と死が訪れる。

そして高温の岩盤。最高温度二六〇度にも達する過酷な作業。触れば火傷で済まない。そこで動き続けた工夫と技師達の記録小説が、『高熱隧道』である。

フィクションとノンフィクションの入り交じり。それがこの話のこわいところだ。登場人物は架空であるものの、作業環境は綿密な取材に基づいているのだという。一六〇度の岩盤は実在していたというのだ。『谷川の水をホースで汲み上げ、人夫の背中に浴びせかけながら作業を進めた。』本文にはこうある。この時トンネルの気温は平均四〇度以上であった。まるでサウナの中である。現代の空調が整った工事現場からは、まるで想像ができない。当時の人夫は二〇分の作業で交代したそうだが、今の人間では五分ともたないだろう。体力のない私ならなおさらであると想像できる。

トンネルが深くなるにつれ、岩盤の温度は上昇していく。一〇〇度を超えた時、ついにダイナマイトが暴発した。八人の工夫が犠牲となった。遺体はバラバラ。誰かすらも見分けがつかないほどだ。誰一人動けない中、主人公の技師は運び出された遺体を持ち上げた。そして肢体を整え、一人ずつ人型へと戻していった。

物語は三人称視点で書かれている。そのためその行為が、決して勇氣ある行動でないことがわかる。同時に、指揮官としての責任に苛まれての行動でもない。むしろ、人夫の恐怖や怒りを主人公自身に向けさせているような行為に思えた。そうすれば、意識は工事や事故からはずれるだろう。そのような意図すら感じ取れる。さらにその意図も、作業員の心中を鑑みてではなく、国策を、たかがこれだけの事

故で止めさせてはいけない、という負い目から発生しているのではないかと考えられた。言わば彼は中間管理職だ。国策を期限までに達成させるという、非常に大きな責任と、不平不満や恐怖、怒りを間近で放つ作業員達。人夫達は、不満は絶対に口にしない。ただ血走った眼でその気配を坑道に満たす。

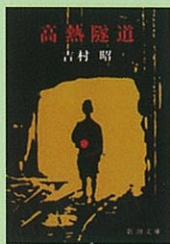
ただでさえ過酷な環境なのだ。常人なら耐えられないだろう。現代人がその現場にいたら、と思うと、やはり耐えることはできないという結論に至る。

ある時、若い技師が雪山へ失踪してしまう。走り去る姿は、必死に何かから逃げているかの様相だった。前にも後ろにも怨嗟の目線。それならいっそ、死を選ぼう。そう考えたのかもしれない。あるいは、その死から逃れようとした結果が死につながったのか。フィクションか、そうでないのか、触れられていないが、現実味がある。

何度も感じたが、高熱隧道はフィクションとノンフィクションの境がわからない節がある。フィクションなのは人名だけで、事件も事故も全て現実にあったことなのかもしれない。

だが一つ確実なことは、ダムやトンネルは実在し、多くの人命が犠牲になったことである。これは決してフィクションでない。今また、あのような工事は、倫理的にも道徳的にも行うことはできないだろう。そう考えると現代の私たちの生活が、いかに多くの先人によって形作られてきたかを思い出させる。そして、多くの犠牲の上に生きていくことを思い知らされる作品であると思う。

この本



高熱隧道

吉村昭／著 新潮社

黒部川第三発電所の工事を技師の目から描いた小説です。犠牲者の多さから富山県警察部が中止命令を出しましたが、戦前の国策によって続けられた難工事を描いた作品です。

文芸部門・散文 銅賞

『富山の風景』を読んで

現在と過去

富山南高校一年 佐木 志保梨

この本には「立山の莊嚴する国」という詩が書かれています。いつ書かれたものかは分かりませんが、この本の発行が一九八三年八月二十日なのでその頃なのだと思います。私が住んでいたところは海も見えて、立山連峰も見える場所でした。そして今住んでいるところは田畑が家の周りを囲んでいるような自然にめぐまれている場所です。この詩には私が見てきたような自然のこと、今も昔も変わらない風景について書いています。前半には平和で自然がまだ乱されていないことが書かれています。その内容は文字を見るだけで内裏に風景が浮かびあがってくるようです。しかし、後半には第二次世界大戦後の富山の様子が書かれています。この部分には科学の発達によって失ったものと得たもの、昔と変わらないものについて書かれています。一文に

「戦争の苦しみをなお身にありて、しかも生きいきと躍動す」

という言葉があります。戦争は決して良いものではありません。しかし、それを嫌な方向にだけ受けとるのではなく、悲しみを背負いながらも戦争を自分達の糧にして街を発達させてゆくという日本人の強さが読みとれます。詩の最後のほうに放射能という言葉がでてきます。この部分は状況は違いますが今の日本にも関係があります。私は当時放射能を打ち払うことができたのだから今回も打ち払うことができるということを感じています。一つ一つの段落の最後に

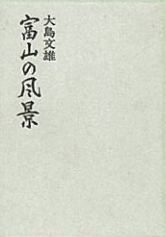
「われら かなしくも この郷土を愛す」

と書かれています。私には大島文雄さんがどのような思いで書かれたのか分かりませんが、とても大切に富山を思う気持ちがかめられているのでしよう。

この本には詩だけでなく、色々な話のついでです。一つ一つの話がとても考えさせられるものです。よく昔とは変わってしまったと言いますが、文化の発達は昔に比べ大きく変化したでしょう。しかし、自然、人の温かさ、日本人の粘り強さは昔から変わらないものだと思いました。今、日本にはたくさん問題があります。また高校生の私には難しく分らないこともたくさんあります。けれど、

先のこと、先のことと考えるのではなく、昔に戻り先人達の知恵を借り、少し違う視点でみてみると新しい道を探ることができるのではないのでしょうか。

この本



富山の風景

大島文雄／著 新興出版社

富山大学名誉教授であった著者が、富山の風土と人々、日本人の美意識に関わる視点からの問題提起、人を想う心などを新聞社などに寄稿した四十三の随想が収録されています。(入手困難)

『劔岳へ点の記』を読んで
遙か高く

高く たかく そびえ立つ山
白雪に覆われ 銀に輝く姿も
紅葉に彩られ 緋色に染まる姿も
見る者を 自分の世界へ引きこむ

富山高校二年 野村 優

気高く、誇り高く 鎮座しているそれは
「岩と雪の殿堂」と呼ぶにふさわしく
圧倒的な存在感を放つ

劔の名のとおり 荒々しい岩肌は
その山の険しさを 忠実に表す
しかし 諦めずに挑戦した者だけが
頂上からの景色と えもいえぬ達成感を
手に入れることができる

劔の山 劔岳は
今日も挑戦者達の前に立ちはだかつている

『私の戦争体験記』を読んで
T 湯仰

そこに聳えている
巨きな地面のふるえから
雨と風から
わたしたちをばばむ
あなたは呼吸する

富山高校二年 小森 雄三

すべり落ちた爆弾の熱で灼け
死んでいったひとたちの
あの日の叫びさえ聴いていたあなたは
これからもここで起きるすべてを
見る

その稜線から太陽がのぼり
わたしはあなたを見つめ
あなたは静かに見つめかえす
いまもわたしは
ただあなたを恐れ
ただあなたに縋る

この本



私の戦争体験記
富山県戦後50周年記念事業実行委員会
富山市民感謝と誓いのついで実行委員会 / 北日本新聞社
戦後五十周年の節目に公募された戦争・空襲体験手
記七十二編を集録。富山大空襲や戦争にまつわる思
い出と平和への強い願いが込められ、戦争体験のな
い若い世代に語り伝えたい一冊です。(入手困難)

『地震の記憶』を読んで
愛

時は幕末 攘夷と開国 国揺れる
大地震にて 国揺れる
親子五人は飛び起きる
ガタガタ 地が鳴き
ワーワー 子は泣き
バタバタ 夫婦は走る、はしる
幼子三人外に連れ出し
ガタガタ 家が揺れ
バキバキ 家は崩れ
バサバサ 夫婦は埋まる、うまる
子を包む 赤い空
子を包む 親の愛
生きて。

魚津高校二年 山岡 李帆

『万葉集』を読んで
ふるさとの山

部活帰りにふと空を見上げると
夕日に映える立山が見えた
一人家路を急ぐ足が止まり
しばらく紅い立山と向かい合った
こんな風に立山を見たのは
久しぶりだな：

高岡市立伏木中学校三年 飯田 絵梨奈

小学校の時は、
教室の窓から見える立山の
色々な表情をノートに描いたりしたっけ
中学生になって初めてだろうか
ずっと下を向いていたのだろうか
そんな私を
夕映えの立山が今、静かに見ている
きつと、ずっと
私を見ていてくれたのだろう
心のふるさとを見つけた気がした
心の迷いが夕日にとけていく
前を向いて歩き始めた私がい

この本



地震の記憶
廣瀬誠 / 著 桂書房
安政五年二月二十六日未明、大地震に襲われ
た越中。眠りを覚まされた人々。家屋倒壊や液
状化噴出等数十の証言を古文獻から克明に解析
した作品です。

文芸部門・短歌

銀賞

『蜚川』を読んで

Late summer

魚津高校二年 向井 星

螢舞う

夜の川辺に儚くも

明滅するは 命の光

この本



蜚川（蜚川・泥の河）
宮本輝／著 筑摩書房
昭和三十年代の富山県を舞台に、父親の事業がうまくいかない中で、少年の淡い恋の目ざめと人間的成長を描いています。芥川賞を受賞した名作です。

文芸部門・短歌

銀賞

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

西の空

富山北部高校三年 佐竹 杏葉

祖母十八 赤く染まった

西の空

私十八 花火が開く

この本



富山大空襲・戦争体験記
富山市民感謝と誓いのついで実行委員会／富山市
昭和二十年八月一日未明の富山大空襲の惨禍を戦争体験のない若い人たちが等後世に受け継ぐため、富山市が体験者から募集し、六十八編にまとめた心魂迫る体験記です。

文芸部門・短歌

銅賞

『若き日の詩人たちの肖像』を読んで

手

魚津高校二年 森田 舞

土色の しわを刻んだ

祖母の手は

強く優しくまた美しく

この本



若き日の詩人たちの肖像
堀田善衛／著 集英社文庫
高岡市伏木の廻船問屋に生まれた少年が、上京し、就職、徴兵を受けるまでを描く、堀田善衛の青春時代の自伝的小説です。

文芸部門・短歌

銅賞

『越中国と万葉集』を読んで

二上山のふもとの

高岡市立伏木中学校二年 一宮 三恵

稲妻に 照らし出されし 妹の

寝顔すこやか 盆の夜

この本



越中国と万葉集
高岡市万葉歴史館
大伴家持を中心とする越中万葉の世界から加賀藩の越中万葉研究や近代歌人たちの足跡を写真や図表を用い楽しく分かりやすく学べる一冊です。

文芸部門・俳句

金賞

『劔岳へ点の記』を読んで

ふるさと

魚津高校一年 中島 茉美

凍雲を まといそびえる 劔岳

文芸部門・俳句

銀賞

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

メニウツルノハ

富山北部高校三年 米田 彩華

オモイデト キョウドロモヤス センカノヒ

文芸部門・俳句

銅賞

『すっぴん魂』を読んで

富山の思い出

富山北部高校三年 野上 知美

ひと夏の 思い出頬ばる ますの寿司

この本



すっぴん魂
室井滋／著 文藝文庫刊
たとえメイクはしていても、心の中はいつもすっぴん。大笑いの後でホロリと泣ける作品です。女優として活躍する著者の人気エッセイ集。

文芸部門・俳句

佳作

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

あの火

富山北部高校三年 島田 小町

火の海の あの日思わす 焼けトタン

文芸部門・俳句

佳作

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

雨晴海岸にて

高岡市立伏木中学校三年 早平 光志郎

立山と 背比べする 雲の峰

文芸部門・俳句

佳作

『越中国と万葉集』を読んで

二上山のふもとの

高岡市立伏木中学校二年 一宮 三恵

稲妻に 照らし出されし 妹の

寝顔すこやか 盆の夜

この本



越中国と万葉集
高岡市万葉歴史館
大伴家持を中心とする越中万葉の世界から加賀藩の越中万葉研究や近代歌人たちの足跡を写真や図表を用い楽しく分かりやすく学べる一冊です。

文芸部門・俳句

銅賞

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

あの火

富山北部高校三年 島田 小町

火の海の あの日思わす 焼けトタン

文芸部門・俳句

佳作

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

雨晴海岸にて

高岡市立伏木中学校三年 早平 光志郎

立山と 背比べする 雲の峰

文芸部門・俳句

佳作

『富山大空襲・戦争体験記』を読んで

雨晴

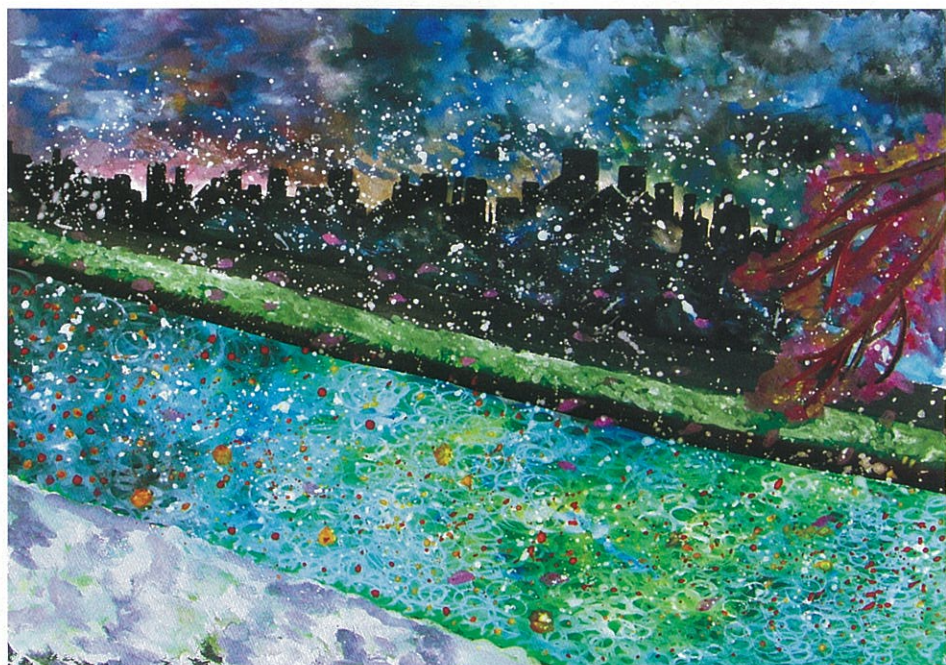
高岡市立伏木中学校三年 早木 隆盛

立山の エールがひびく 有磯海

この本



越中万葉百科
高岡市万葉歴史館
大伴家持らの、とやまに因る歌とその解説を一冊にまとめました。「越中万葉」の文学的な価値とともに、北陸の自然にふれて大きく開花した大伴家持の歌作りを解明します。



美術部門 金賞
「灯火光る川」今村 莉那 (小杉高校2年)
〈釜川〉 38.0 × 54.0

この本

風の盆恋歌

高橋 治 / 著 新潮社

互いに心を通わせながらも、離れ離れに二十年の歳月を生きた男女の心の揺らぎを、金沢、パリ、八尾を舞台として情趣豊かに描く恋の物語。テレビドラマ化されました。



美術部門 知事賞
「ふるさと」由水 誠一 (富山高校1年)
〈街道をゆく〉 54.0 × 38.0

この本

街道をゆく4

司馬 遼太郎 / 著 朝日文芸文庫

四十三冊にわたる短編紀行文集の一つ。白川郷、五箇山で浄土真宗が広まっていた歴史を五箇山の村上家で見た民具の優秀性などともに紹介しています。また、越中は呉羽山を境にして異なる文化圏を形成していることや、立山信仰や修験道なども紹介しています。



美術部門 銀賞
「郷土の宝物」石坂 汐里 (滑川高校1年)
〈キトキトの魚〉 54.0 × 38.0

この本

キトキトの魚

室井 滋 / 著 文藝春秋

とやま弁の〈キトキトの魚〉のように元気で健気な少女時代、自信過剰な一人っ子時代、事件を呼ぶ女と呼ばれた青春時代。女優として活躍する著者の面白くも切ないエッセイです。

凡例 部門
題名 / 名前 (学校名・学年)
〈 〉 は原作 サイズ (タテ×ヨコ) cm

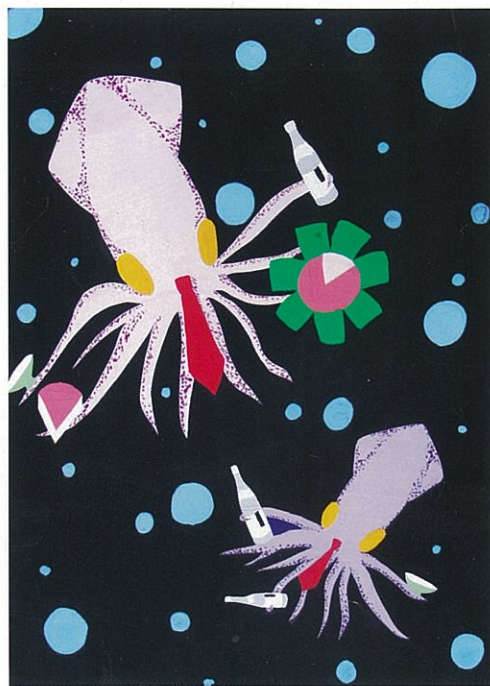


美術部門 銅賞
「夜の輝き」 平野 直実 (小杉高校2年)
 <螢川> 54.0 × 38.0

この本
 ホタルイカの素顔
 奥谷 喬司 / 著 東海大学出版会
 ホタルイカの日々の生活や一生、その発光する生体の中で起きているさまざまな現象の詳細について、形態学、生活史、発光生化学、視覚生理学、分類学等々の立場から描かれています。



美術部門 銅賞
「私たちの立山連峰」 木下 佑紀乃 (富山北部高校1年)
 <劍岳<点の記>> 38.0 × 54.0



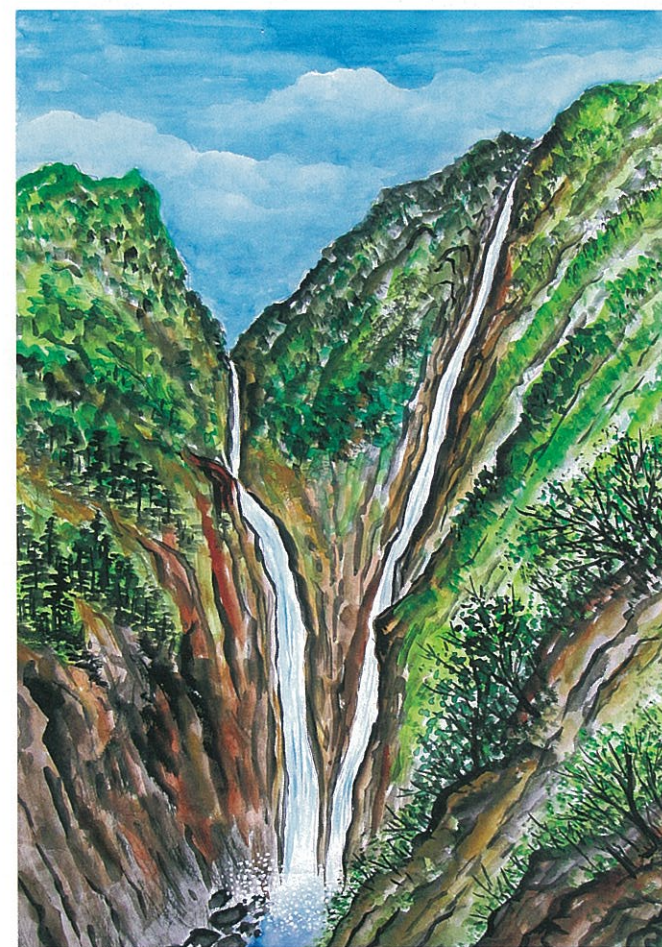
美術部門 銅賞
「海の宴会」 富田 真央 (富山北部高校1年)
 <ホタルイカの素顔> 54.0 × 38.0

この映画

映画「少年時代」
 篠田 正浩 / 東宝
 柏原兵三の小説『長い道』と藤子不二雄Aの同名漫画を原作に、篠田正浩監督が戦時中の都会と地元の少年同士の友情と確執を通して、昭和とは何だったのかを問いかける秀作です。



美術部門 銀賞
「帰りの駅」 井上 夏花 (滑川高校3年)
 <映画「少年時代」> 38.0 × 54.0



美術部門 銀賞
「称名滝と雪解け期だけの幻の滝」 圓佛 菜々美 (富山市立和合中学校3年) <万葉集> 54.0 × 38.0

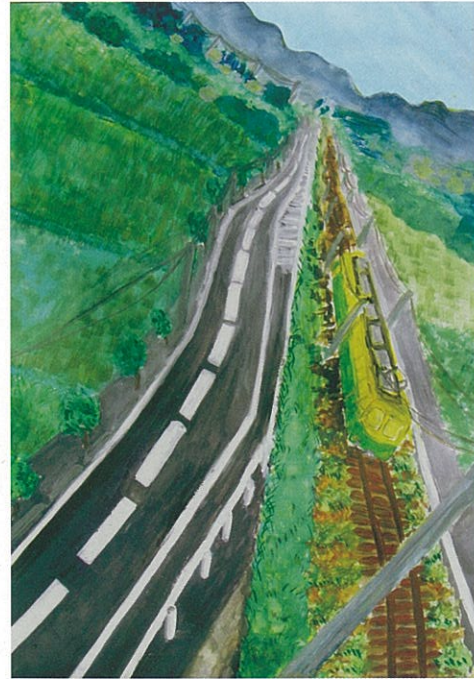
写真部門



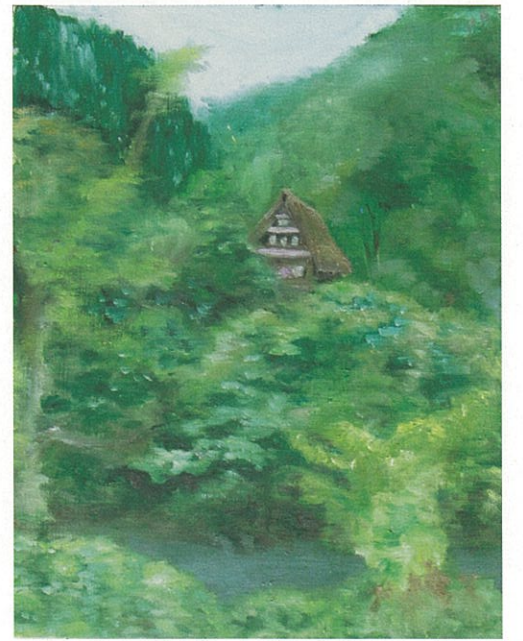
写真部門 知事賞
「おわら幻想」 大瀧 友紀 (高岡第一高校 2年)
 〈祭り囃子がきこえる〉25.4 × 36.6

この本

祭り囃子がきこえる
 川上 健一 / 著 集英社文庫
 ハートウォーミングな八つの短編からなる祭り囃子が呼び起こす優しい記憶の物語。八尾おわら風の盆も舞台として描かれ、情緒あふれる祭り囃子に、誰もが心地よい郷愁に誘われます。



美術部門 銅賞
「落ち着く場所」 三浦 百絵
 (富山北部高校 1年) 〈蜷川〉54.0 × 38.0



美術部門 銅賞
「ふるさと」 山田 菜々子
 (富山中部高校 1年) 〈街道をゆく4〉41.0 × 31.8



美術部門 佳作
「佐々成政 黒百合伝説」 野崎 裕未
 (富山市立和合中学校 3年) 〈黒ゆりの武将・佐々成政〉38.0 × 54.0



美術部門 佳作
「つららのぼうや」 堀 菜佑羽
 (富山市立奥田中学校 1年) 〈つららのぼうや〉38.0 × 54.0

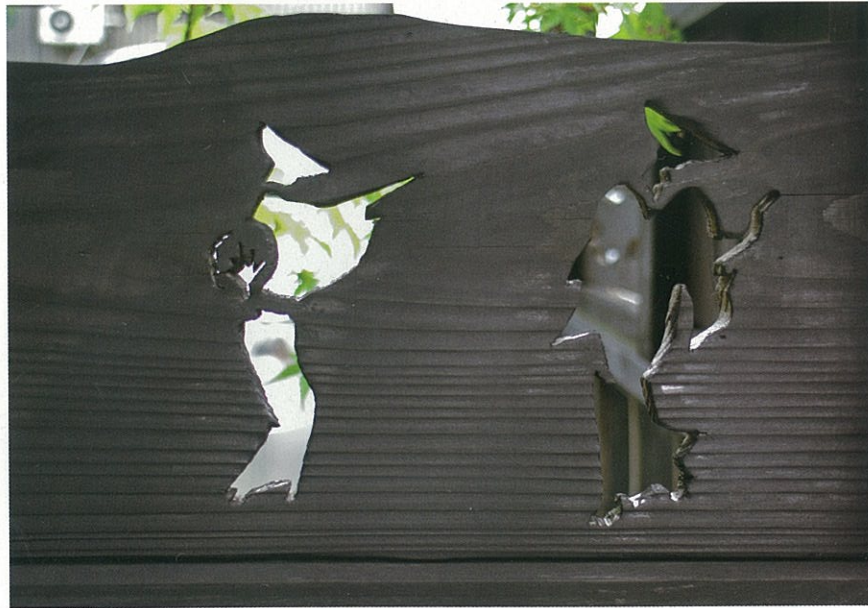
この本

黒ゆりの武将・佐々成政
 伊藤 静 / 著 鳥影社
 富山城主佐々成政は、天正十二年、決死のサラサラ越え(立山縦走)を敢行しました。剛毅で知られた戦国武將佐々成政と側室さゆりの悲劇が生んだ黒ゆり伝説です。

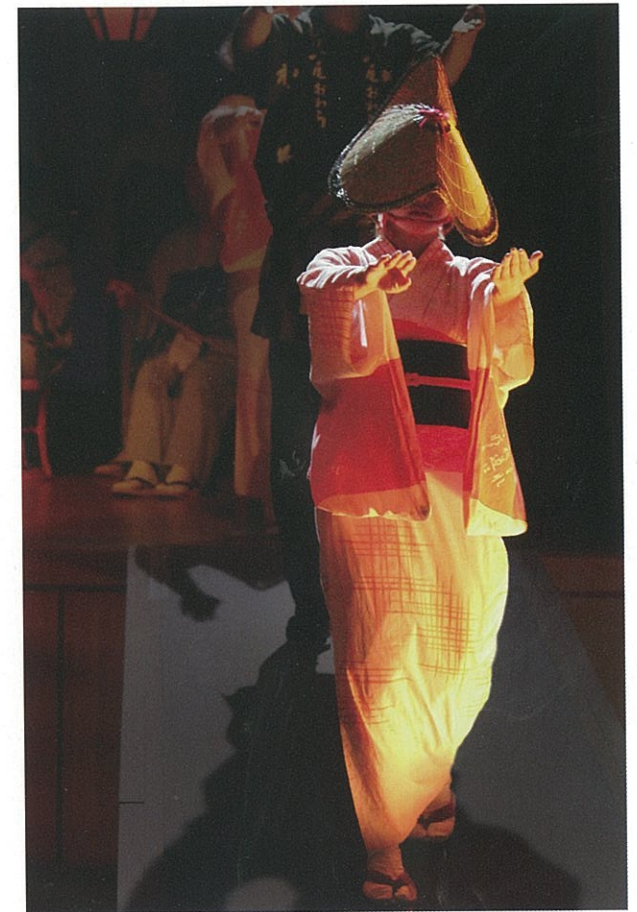
この本

つららのぼうや
 青木 新門 / 著 桂書房
 雪深い合掌造りの軒先で生まれたつららの坊やとおして、子どもたちに命を語る作品です。

凡例 部門
 題名/名前(学校名・学年)
 〈〉は原作 サイズ(タテ×ヨコ)cm



写真部門 銀賞
「やりとり」 坂口 加奈子 (高岡第一高校 2年)
 <祭り囃子がきこえる> 25.4 × 36.6



写真部門 金賞
「八尾の町から」 赤塚 奈緒 (富山東高校 2年)
 <風の盆恋歌> 30.5 × 20.3



写真部門 銀賞
「私はふるさとを残したい」 鶴見 昇乃信
 (南砺福野高校 2年) <とやま面白学・富山の自然再発見> 25.4 × 36.6

この本

とやま面白学・富山の自然再発見
 とやま面白学企画編集会議／北日本新聞社
 富山県民には当たり前でも、実は世界的に珍しい現象、身近な自然の謎が解き明かされます。植物、動物、地学、気象編など、各分野について第一線の学芸員、研究員が解説しています。



写真部門 銀賞
「キットキト高岡」 橋爪 嘉那 (富山東高校 1年)
 <百万石太平記> 20.3 × 30.5

この本

百万石太平記
 南原 幹雄／著 新潮社
 前田利長が、金沢に居座る江戸幕府ゆかりの妻が放った暗殺団から身を守るため、富山城、魚津城、高岡城を次々に転戦し、ついに瑞龍寺を舞台に命を賭けて争う様が、当時の時代背景とともに描かれます。

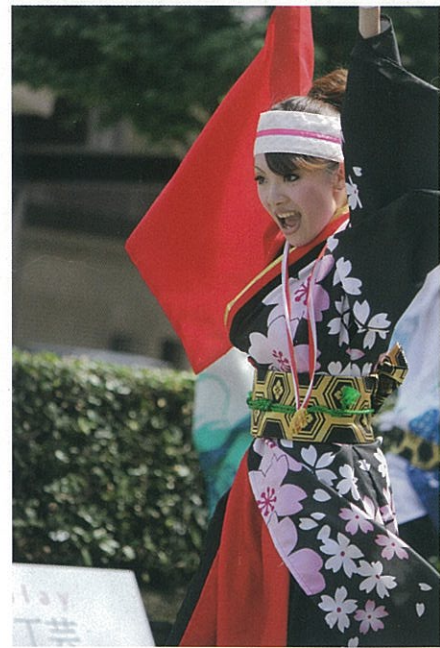
この本

詩集 雪道

青木新門／著 桂書房
雪国に生きることの意味に新しい光をあてた詩集。易しい言葉に込められた深い智恵が感動を誘います。何度も朗読して味わいたい作品です。



写真部門 銅賞
「『よいやさあ!』～共感の力～」岡本 茂樹
(小矢部園芸高校3年) <詩集 雪道> 25.4 × 36.6



写真部門 銅賞
「よさこい」松井 美沙希
(南砺福野高校1年) <越中讃歌> 36.6 × 25.4

この本

越中讃歌

北日本新聞社
山と水がはぐくんだ土地、越中富山ゆかりの文化人が、愛してやまない、ひと・町・自然・味くらし・歴史を語る珠玉のエッセイ集です。

この本

風のまにまに

岩倉政治／著 富山新聞社
福井の吉崎から始まった蓮如の越中の旅。この跡をたずねた二人遍路の独特な絵とユーモラスな文による旅の足跡。富山新聞に連載されました。



写真部門 銅賞
「橋の下の世界」梅基 沙弥 (南砺福野高校1年)
<風のまにまに> 36.6 × 25.4

この本

風の盆

西澤 裕子／著 日本放送出版協会
良質な和紙の生産地として有名な八尾の和紙の里を舞台に、そこで生まれ育ったヒロインの生き方を通して、ふるさととは何かを描き、愛の在り方を探る純愛ドラマです。



写真部門 銅賞
「ゆれて あるく」井伊 向日葵 (富山東高校2年)
<風の盆> 西澤 裕子 20.3 × 30.5

この本

教育と文化 富山100年のあゆみ

富山県教育委員会
富山県が県として誕生した明治十六年からの出来事や暮らしを、多くの写真を交えて解説します。



写真部門 銅賞
「なんと!! 福光の舞」飛口 享子
(小矢部園芸高校3年) <富山100年のあゆみ> 20.3 × 30.5

平成 23 年度「ふるさと文学」情景作品コンクール審査委員会 委員名簿

委員名	役職等
赤川 雅和	富山県立図書館長
柳原 正樹	富山県水墨美術館長
橋本 文良	高岡市美術館副館長(学芸課長)
<委員長> 中井 精一	富山大学人文学部准教授
土橋 星一	県中学校文化連盟書道専門部代表 (富山市立城山中学校教頭)
荒治 和幸	県中学校文化連盟美術専門部代表 (射水市立新湊西部中学校)
寺田 允美	県高等学校文化連盟文芸専門部会 (富山国際大学付属高等学校非常勤講師)
高畑 信雄	県高等学校文化連盟美術・工芸専門部会 (志貴野高等学校教頭 高文連参与)
梅木 宏真	県高等学校文化連盟写真専門部会 (高岡第一高等学校教諭)
笹林 一樹	生活環境文化部参事・文化振興課長 (高志の国文学館建設担当)
平野 富佐	生涯学習・文化財室長 (全国高等学校総合文化祭富山県実行委員会事務局長)

応募状況

応募総数 1,327 点(文芸 1,211 点、美術 74 点、写真 42 点)

部門	文芸					美術			写真			総計
	散文	詩	短歌	俳句	部門計	デザイン	絵画	部門計	単写真	組写真	部門計	
高等学校	260	71	94	675	1,100	9	53	62	41	1	42	1,204
中学校	4	2	9	96	111	0	12	12	0	0	0	123
総計	264	73	103	771	1,211	9	65	74	41	1	42	1,327

入選	知事賞	金賞	銀賞	銅賞	佳作	入選計
	1(1)	1	2	3		7(1)
文芸	1(1)	2	6	9(1)	3(3)	21(5)
	1	1	3(1)	4	2(2)	11(3)
美術	1	1	3(1)	5	2(2)	12(3)
	1	1	3	5	2(2)	13(5)
写真	1	1	3	5		10
	1	1	3	5		10
総計	3(1)	4	12(1)	19(1)	5(5)	43(8)

()は中学生で内数

平成 23 年度「ふるさと文学」情景作品コンクール入選作品

○文芸部門(散文・詩)

賞	題名	分野	学校	名前	題材
知事賞	流転する万物の中で生きる	散文	射水市立大門中学校 2年	盛田 香菜子	鶴のいた庭
金賞	異なる文化と異なる優しさ	散文	魚津高校 2年	高倉 周一郎	漂民次郎吉
銀賞	「花子のくのにの歳時記」を読んで	散文	魚津高校 2年	相川 有希美	花子のくのにの歳時記
	ホタル	散文	富山北部高校 3年	白石 有亮	とべないホタル
銅賞	遥か高く	詩	富山高校 1年	野村 優	劔岳<点の記>
	劔岳 点の記を読んで	散文	魚津高校 1年	黒崎 晴子	劔岳<点の記>
	先人の礎	散文	魚津高校 2年	田中 悠也	高熱隧道
	現在と過去	散文	富山南高校 1年	佐木 志保梨	富山の風景
	下湯仰	詩	富山高校 1年	小森 雄三	私の戦争体験記
佳作	愛	詩	魚津高校 1年	山岡 季帆	地震の記憶
佳作	ふるさと	詩	高岡市立伏木中学校 3年	飯田 絵梨奈	万葉集

○文芸部門(短歌・俳句)

賞	題名	分野	学校	名前	題材
金賞	ふるさと	俳句	魚津高校 1年	中島 菜美	劔岳<点の記>
銀賞	Late summer	短歌	魚津高校 2年	向井 星	螢川
	メノウツルノハ	俳句	富山北部高校 3年	米田 彩華	富山大空襲・戦争体験記
銅賞	西の空	短歌	富山北部高校 3年	佐竹 杏菜	富山大空襲・戦争体験記
	富山の思い出	俳句	富山北部高校 3年	野上 知美	すっぴん魂
	あの火	俳句	富山北部高校 3年	島田 小町	富山大空襲・戦争体験記
	手	短歌	魚津高校 2年	森田 舞	若き日の詩人たちの肖像
	二上山のふもとの	短歌	高岡市立伏木中学校 2年	一宮 三恵	越中国と万葉集
佳作	雨晴海岸にて	俳句	高岡市立伏木中学校 3年	早平 光志郎	万葉集
佳作	雨晴	俳句	高岡市立伏木中学校 3年	早木 隆盛	万葉集

○美術部門

賞	題名	分野	高校	名前	題材
知事賞	ふるさと	絵画	富山高校 1年	由水 誠一	街道をゆく
金賞	灯火光る川	絵画	小杉高校 2年	今村 莉那	螢川
銀賞	郷土の宝物	絵画	滑川高校 1年	石坂 汐里	キトキトの魚
	帰りの駅	絵画	滑川高校 3年	井上 夏花	映画「少年時代」
銅賞	称名滝と雪解け期だけの幻の滝	絵画	富山市立和合中学校 3年	圓佛 菜々美	万葉集
	夜の輝き	絵画	小杉高校 2年	平野 直実	螢川
	私たちの立山連峰	絵画	富山北部高校 1年	木下 佑紀乃	劔岳<点の記>
	海の宴会	デザイン	富山北部高校 1年	富田 真央	ホタルイカの素顔
	ふるさと	絵画(水彩)	富山中部高校 1年	山田 菜々子	街道をゆく 4
佳作	落ち着く場所	絵画	富山北部高校 1年	三浦 百絵	螢川
佳作	つららのぼうや	絵画	富山市立奥田中学校 1年	堀 菜佑羽	つららのぼうや
佳作	佐々成政 黒百合伝説	絵画	富山市立和合中学校 3年	野崎 裕未	黒ゆりの武将 佐々成政

○写真部門

賞	題名	分野	高校	名前	題材
知事賞	おわら幻想	単写真	高岡第一高校 2年	大瀧 友紀	祭り囃子がきこえる
金賞	八尾の町から	単写真	富山東高校 2年	赤塚 奈緒	風の盆恋歌
銀賞	キットキト高岡	単写真	富山東高校 1年	橋爪 嘉那	百万石太平記
	やりとり	単写真	高岡第一高校 2年	坂口 加奈子	祭り囃子がきこえる
銅賞	私はふるさとを残したい	単写真	南砺福野高校 2年	鶴見 昇乃信	とやま面白学・富山の自然再発見
	橋の下の世界	単写真	南砺福野高校 1年	梅基 沙弥	風のまにまに
	なんと!! 福光の舞	単写真	小矢部園芸高校 3年	飛口 享子	富山 100 年のあゆみ
	「よいやさあ!」~共感の力~	単写真	小矢部園芸高校 3年	岡本 茂樹	詩集 雪道
	よさこい	単写真	南砺福野高校 1年	松井 美沙希	越中讃歌
佳作	ゆれて あるく	単写真	富山東高校 2年	井伊 向日葵	風の盆

2012 全国高総文祭とやま2012



大会テーマ

創造の舞台～美しき越の国～



生徒実行委員会が全国の高校生をお迎えするため準備を進めています！

- 会 期：平成24年8月8日(水)～12日(日)
- 開会行事：総合開会式、パレード
- 開催部門：23部門(県内全15市町村が会場)

開催部門等	主会場	所在地	日程(平成24年8月)				
			8(水)	9(木)	10(金)	11(土)	12(日)
総合開会式	富山市芸術文化ホール[オーバード・ホール]	富山市	○				
パレード	富岩運河環水公園～富山市芸術文化ホール[オーバード・ホール]前までの約1km	富山市	○				
演劇	富山県民会館	富山市			○	○	○
合唱	高岡市市民会館	高岡市					○
吹奏楽	新川文化ホール	魚津市		○	○		
器楽・管弦楽	富山市芸術文化ホール[オーバード・ホール]	富山市			○	○	
日本音楽	高周波文化ホール[新湊中央文化会館]	射水市				○	○
吟詠剣詩舞	北アルプス文化センター	上市町					○
郷土芸能	砺波市文化会館	砺波市			○	○	○
マーチングバンド・バンド・パントフリンク	氷見市ふれあいスポーツセンター	氷見市			○		
美術・工芸	富山県民会館、富山県教育文化会館	富山市	○	○	○	○	○
書道	魚津テクノスポーツドーム[ありそドーム]	魚津市	○	○	○	○	○
写真	南砺市福野文化創造センター[ヘリオス]、五箇山	南砺市	○	○	○	○	○
放送	富山国際会議場、富山市民プラザ	富山市				○	○
囲碁	朝日町文化体育センター[サンリーナ]	朝日町	○	○			
将棋	クロスランドおやべ	小矢部市	○	○			
弁論	舟橋会館	舟橋村	○	○			
小倉百人一首かるた	黒部市総合体育センター	黒部市		○	○	○	
新聞	ウイング・ウイング高岡	高岡市	○	○	○	○	○
文芸	宇奈月国際会館[セレネ]	黒部市	○	○	○	○	○
	高岡市万葉歴史館(文学散歩)	高岡市	○				
	立山博物館(文学散歩)	立山町	○				
	高志の国文学館(文学散歩)	富山市	○				
自然科学	入善町民会館[コスモホール]、入善高校	入善町			○	○	○
	立山青少年自然の家	立山町				○	○
ボランティア	滑川市民交流プラザ	滑川市		○	○		
特別支援学校	富山県民共生センター[サンフォルテ]	富山市	○	○	○	○	
定時制通信制	ウイング・ウイング高岡	高岡市				○	○
茶道	国宝瑞龍寺	高岡市		○	○		

【総合開会式】



第3部構成劇
「あと一つ～LAST BUT NOT LEAST」

【パレード】



60団体約2千名によるパレード

【国際交流】



韓国、中国、ロシアから4校が来県

詳しくはホームページで

全国高総文祭とやま2012

検索

平成23年度「ふるさと文学」情景作品コンクール入選作品展示



第16回富山県中学校文化祭

平成23年10月16日(日)

クロスランドおやべ



第8回県民カレッジ 高岡地区センター学遊祭

平成23年10月28日(金)～30日(日)

県民カレッジ高岡地区センター、志貴野高校



第11回となみキャンパスフェスティバル

平成23年11月4日(金)～5日(土)

県民カレッジ砺波地区センター、となみ野高校



第11回新川キャンパスフェスティバル

平成23年10月29日(土)

県民カレッジ新川地区センター



第23回富山県高等学校文化祭・ 第36回全国高等学校総合文化祭プレ大会

平成23年11月18日(金)～20日(日)

富山県民会館